

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

No.75

源氏物語夕顔図（部分）

古川松根筆 一幅

絹本着色 一六・二×四八・三(cm) 個人蔵

本図は「源氏物語」夕顔に取材している光源氏が、五条のあたりを通りかかった時、簾の涼しげな家の美しい女に興味を覚え、その家に映く白い夕顔の花を随身に折りとつてくるよう命ずる。すると、中から童女が現われ簾に夕顔をのせて源氏に渡すよう告げるその場面が描かれている。この後、源氏はこの家の優しくなまめかしい女のものとにかくようになるが、間もなくこの女「夕顔」は物の怪に取りつかれ息絶える。作者の古川松根は、様々な画風を試みるなかで、本図

学んだと考えられる。尊皇思想が盛んになる幕末期には、田中詔言・宇喜多一葦・冷泉為恭ら大和絵復興を期す画人が現れている。この種の復古大和絵作品は、彼の国學研究と密接に結びていたと思われるが、漢画系が支配的だった佐賀藩においては、一際目だった存在がある。いずれにせよ、本図は多才の人松根の画における技術が窺える優品である。（古川松根展出品資料）

古川
松根

目 次	○源氏物語夕顔図（部分）	表紙
	○「古川松根展」案内	2~3 P
	○資料紹介・工芸 — 市井の彫金家 松尾忠次 —	4~5 P
	○資料紹介・歴史 — 新収蔵 島義勇関係史料 —	6~7 P
	○行事のお知らせ	8 P

古川松根展

主 催 佐賀県立博物館
会 場 佐賀県立博物館 3号展示室
会 期 昭和62年1月23日(金)～3月1日(日)(開館9時～16時半、入場16時まで。月曜休館。)
観 覧 料 大 人 200円 (150円)

大・高生 150円 (100円)
中・小生 70円 (50円)
(上記の博物館・美術館常設展観覧料会のなかで観覧できる。()内は20名以上の団体料金)
展示概要 古川松根資料および関係資料約100点。

幕末佐賀藩の逸材・古川松根

君ひとりのこしまつりて故里に
帰る心のあらばこそあらめ
今はとていそぐや終の旅衣

たちおくるべきわが身ならねば

この二首は古川松根の辞世の句である。佐賀藩第十代藩主鍋島直正(閑叟)に仕えた松根は、直正薨去の三日後明治4年(1871)1月21日、主君への思いを歌に残し殉死を遂げた。

松根は、文化10年(1813)10月16日江戸桜田の鍋島藩邸で、江戸詰の藩士古川与兵衛爵綱の三男として生まれた。(通称を初め英次のち与一といい、実名を初め徳基のち松根と改めた。楳園・寧楽園・霞庵などの号をもつ。)幼児に一歳年下だった直正の御相手に選ばれて以来、近習から近習頭となり、文字どおり影のごとく直正の側で仕え通した。

幕末の開明的藩主直正を語ると、久米邦武をして「純忠」と言わしめた松根の偽らざる忠誠は、不可欠な要素であったといえよう。東京と佐賀にある直正のそれぞれの墓地には背後に松根の墓がもうけられ、また第二次大戦前まで佐賀市松原に直正の銅像とともに松根の銅像も立てられていたが、それらは松根の忠誠をたたえるものであった。

銅像の失われた今日、松根を知る人も少なくなったが一方で松根が得意とした和歌や書画などが多数残されている。それらの作品は、端然としたものから機知に富むものまで様々であるが、いずれも芸術性豊かなものであり、経歴からくる勤勉直率なイメージとはうらはらな感性あふれる松根の人間性を感じることができる。

松根は和歌国文に最も長じ、書・画・篆刻を行い、有職故実に通じ「凡て衣食住の美想には一として通曉せざるなく」と伝えられる。さらに、雅楽では笙を奏したと伝えられ、古器骨董・刀剣の鑑識を行い、西洋式兵法にもぐわしかった。

松根の父爵綱は、第九代藩主齊直に仕え右筆案文役・陶器方・御産方・御縁組御養子方・御葬送方や江戸藩邸の作家など種々の役職を務めており、器用さとともに信望の厚い人物であったようだ。また母仲は、「肥前忠吉」の名で知られる刀工橋本家の出で、松根の二番目の兄は橋本家を継ぎ八代忠吉として知られる。従て、松根の才能も多分に両親ゆずりのものであったと想像される。それに加えて、直正が受けた英才教育を役職上松根も共



作者不詳 古川松根像

に体験することができたであろうから、このことが元来の素質を一層発展させる結果を生んだと考えられる。

幾つか例を挙げると、和歌は香川景樹に学んだとされ、加納諸平・長沢伴雄・中島廣足など当時の著名な歌人国学者と盛んに交流を行っている。また、郷里佐賀において和歌結社小車社をつくり、そこには藩主直正から足軽・商人・僧侶など各層の人が参加していて興味深い。

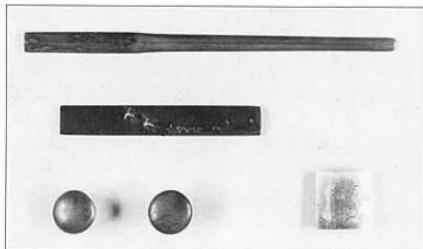
画は、大和絵・写生画・南画・浮世絵と様々な画風を巧みに描いている。住吉派の弘貴や柴田是真などの著名な画人からの影響が考えられ、画家としても知られる同郷の儒者草場佩川とは画を通しての交友関係にあった。あくまで余技であったろうが、持前の器用さと好学心ですぐれた作品を残している。

また、鍋島藩の意匠も少なからず手がけている。さらに刀剣の外装の意匠も試みたり、自家の家紋を新たに創作したことなどが知られ、意匠家として的一面も持っていた。

松根の場合、とかく「純忠之臣」としての面ばかりが強調されがちであるが、今回の展覧会では、松根の多彩な才能を紹介し、幕末の激動期に松根が果たした文化面での業績を再認識しようとするものである。

(学芸員 福井尚寿)

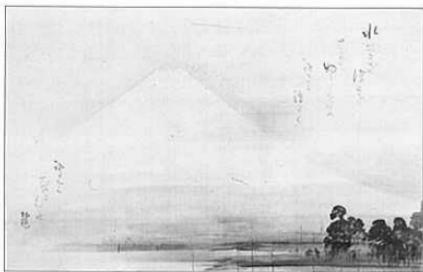
主な展示資料



三所物と筆（右下）



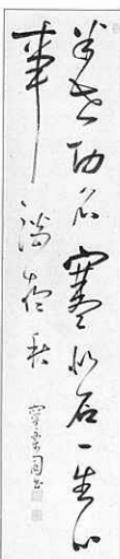
柴付山水図蓋物蓋（圓松根）



柴田是真 富士山図（鑽松根）



書画帖より



二行書



軍營の月図並讃



美人図



紀貫之像（鑽富小路政直）

《作家紹介・工芸》

市井の彫金家 松尾忠次

現在活躍中の佐賀県を代表する日本画、洋画、彫塑、工芸、書の作家たちの代表作を一堂に集めた佐賀県現代美術展が今年2月に開催された。工芸部門ではまず陶磁器、そして佐賀銘や染織の色鮮かな作品が艶を競う。中にただ一つ「鉄地銀彩壺」と名づけられた異質な素材が静かに一隅を占めていた。鋭角的な構成、鉄地とあるが堅い金属というよりも木肌のような不思議に温か味があり、重量感より明るい軽さを感じさせる作品。この作品を生み出した松尾忠次氏に創作のエピソード、金属工芸の技法の一端を語っていただき、以下に紹介したい。

明治42年（1909）佐賀郡富士町上熊川で造酒屋を営む祖父の家で生まれ、佐賀農業高校（当時佐賀市多布施町）に勤める父親や家族と佐賀市川原小路（現川原町）で過ごす。赤松小学校時代に佐賀師範学校卒業直後の田原輝（洋画家、1900～1982）に上京前のわずか一年、担任してもらったのが印象に残っているという。この頃から物を作ることが好きで、龍谷中学校を経て東京美術学校を受験、後日師事することになる彫金家清水亀蔵（南山、1875～1948）から、面接時に「食べていくのがやっとですよ。」とさせられ、父親からは勘當同然の状態で上京する。

当時の美校には、佐賀県出身で鍛金部教授石田英一（1876～1960）が在職、宮内省調度寮には同校卒業で日々出品品もある江島信一（1884～）など金工科に関わる同郷者は少なくなかった。

美校時代は、「専門ノ技術者ヲ養成スル」（東京美術学校規則）ことを目的として、あくまで基本的な彫金、鍛金、塑造などを学ぶ。彫金では加納夏雄（1828～1898）、海野勝珉（1844～1915）といった伝説的名工の手板（手本）を模倣することから始める。理論は模倣と修得のくりかえしから身につくものとする職人技の世界であり、学生の公募展出品や作家活動は考えられなかつたといふ。だが次第に高度な技術を手のうちに持つにつれて、創作の欲求が高まり、自己表現の手段を捜し求めるようになる。一時期、海野清（1884～1956）のもとに住込み、その父勝珉の作品鑑定に同席した機会に、真作以上の鑑定、技術的には全く損色のない鑑定作をまのあたりにする——作品の作品たる本質と技術的な完成度とのかかわりを自らに問う姿勢。これが今でも創作の基調となっている。

昭和11年（1936）、東京美術学校工芸科彫金部を卒業、満州國奉天市中央銀行造幣廠に就職、硬貨デザインの仕事を任される。大阪造幣局で催された硬貨デザインのコンクールに応募した作品が佳作に入賞、製作面で技術的な細かい配慮のゆきとどいたデザインが局側専門家の目にとまって、昭和13年（1938）29歳の時、自作の穴あき十錢硬貨が実際に鋳造される。

10年を満州で勤めたあと、戦後独立。自営業のかたわら、一年一作と自分で課して創作を始める。

昭和26年（1951）第7回日展に「鉄布目花瓶」が初入選、以後昭和61年（1986）第18回日展入選の「双翅」に至る。残念ながらこの記念すべき初入選は、昭和32年（1957）に開かれた通称「ソ連展」（日本現代工芸美術展）と銘うたった当時の工芸選抜展で陶磁、漆工、金工、染織などの代表作家の作をまとめてモスクワで開催。)のための買上作となり、現在は日本にないという。ちなみに佐賀県からの出品は、陶磁部門・県有、今泉今右衛門、久保英雄、丸田正美、中里忠夫、中里太郎右衛門（無庵）、奥川忠右衛門、酒井田祐右衛門、辻貞男（一堂）、山口為男、金工部門では松尾忠次のみであった。

創作は、まず浮かんだアイデアを簡単なスケッチに描くことから始め、次第に細密化、複雑化してゆく課程でメモスケッチを重ねる。無機的な構造の金属が、たとえば魚のような身近な素材から発展（好んで加飾文に使われる長方形の対角線分割は鱗のモチーフという）して、最終的にはより本質にせまる単純化された構成へとまとめられる。次に、ボール紙の実物大模型を組み立てて広い空間（早朝の広場など）で未完の作品が占める全体像を確かめ修正を施す。かつては床の間空間の芸術であった工芸が、現代建築の空間へと進出し、宇宙空間へと無限の理想を拓げてゆき、物体の内なる宇宙と外なる宇宙がその空間の中に緊張調和の関係をつくり上げた時に、形の創造、作品が誕生するはずだから。

ここ数年間の作品構成は、あらゆる線の基本となる直線に限り、その制約の中に深きと拓がりの可能性を求める造型に挑戦している。直線構成の形は、下地作りをよそに委託する場合（彫金の場合はほとんどの下地を外注する）、実物大型紙と寸分たがわぬ仕上がりが見込めるという利点もあるという。

素材を金属に求めたのは、佐賀の工芸、陶磁器の形態と文様から、素材や手法のできるだけ違ったものをと考えた結果で、現在下地としている鉄の硬（直線との相性もよい）と銀の軟（軽快な明るさを装飾に）が直線造型とあわせて創作の基調となっている。一時期下地とした銅鋳造の作品は、粘土で型を使い、それから石膏型を起こした上に、東京芸大の銀金科に送り下地を製作してもらうというもので、時間も手間もかかり2～3回で中止したということだ。

下地ができるがると次は文様の配置通りに加飾、つまり銀線を用いた線の肉象嵌（下地に金属製のタガネで刻んだ溝に線を浮彫状に埋め込んでゆく方法）、線の平象嵌（溝に埋め込まれた線が下地と同じ平面になる方法）そして銀の薄板（厚さ0.03～0.04mm）を用いる布目象嵌といった技法が作品に表情をつける。どの技法も接着剤の役をするのは銀自体の軟らかさのみで、最初に仕上げられる布目象嵌は以下のおり、鉄下地にやすり目のタガ

を入れる。薄い銀板を焼鍛^{しおうとう}（加熱して加工しやすい軟らかさにする）して、やすり目の溝に竹のタガネで打ち込む。鉄下地の細かな凹凸に軟らかな銀の薄板が侵透したような状態で、表面はヤスリ目どおりの細かな条紋があり光の加減で装飾的な効果をみせる。次に肉象嵌、平象嵌の溝を刻むタガネ打ち、焼鍛した銀線を打込んで彫金の工程を終える。

鉄下地に着色する前に、作品全体の脱脂（下地のあく抜き）をする。まず全体をへちまたわしにつけた灰、一部クレンザーも併用して磨き、希硫酸の溶液に5～6時間つけて表面をなめらかにする。中和剤の重炭酸ソーダを加えて水洗い、そして煉瓦窯でおこした木炭の上に直接作品をのせて乾燥させる。さて自称「鰐のかば焼」のような付焼による下地着色は、この木炭上の作品に赤褐色の錆色をつけるために鷺冠石（硫酸砒素）、硫黄、胆礦（硫酸銅）、金立山の赤土を合わせた溶液の刷毛塗り（万古焼の土肌のようななめらかな褐色が理想）と乾燥をくり返す。途中14～15回くらいで一度水洗いして錆色の加減、むらの有無を確かめた上で、再び乾燥、刷毛塗りをくり返し着色を終える。20～30回の付焼で、銀の部分も黒くなっている。

一時期作品に使ったことのあるアマルガム・メッキは水銀に純金を溶かし込み金色に発色させるものだが、加熱して原液を作る時、炭火の上で刷毛塗り乾燥をくり返す時に有毒ガスが発生するため2、3点製作した後に断念したという。また緑色を発色させるための天然緑青も入手困難で、現在は鉄の付焼が主力である。

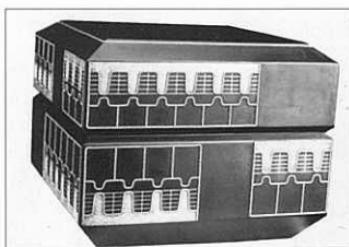
仕上げは、まず木綿布で作品の表面を磨き出すことから始まり、付焼で発色した赤い錆色を永続的に作品に残し、温潤な日本の気候で作品内部から生じる錆を防ぐためあく煮（灰を混ぜた水の上澄み：あく水）をする。ドラム缶で沸湯後3時間、延べ5時間のあく煮で、灰の中の微細な砂粒が銀象嵌を磨きあげ美しい光沢が生まれる。乾燥、そして作品全体の保護のため植物油（オリーブ油）を布に染みこませて一回だけ塗付、油のあとをぬかで磨き上げて完成する。

構想からほぼ一年の辛苦が、この一作一作に刻み込まれ、塗り込まれて完成する。それは「自己修練」と呼ぶにふさわしい行為、創作に魅せられた人間の業なのだろう。35年間、こうしてこつこつと作品を生み出し、日展に出品するエネルギーをもちながら、どの会派にも属さず、あくまで街の金工屋さんの淡々とした表情をくずすことがない。人生に対しても、人生と不可分の創作に対しても誠実でいられるというストイックではあるが幸福な作家松尾忠次氏、彼の静かな力強い次回作を期待したい。

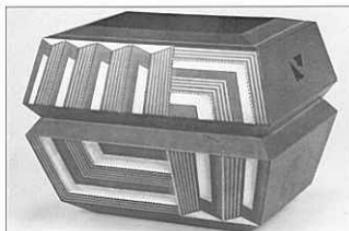
（学芸員 宮原香苗）



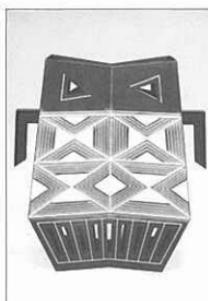
「鉄布目花瓶」第7回日展（1951）初入選；下地は工業用パイプの引抜钢管を利用したもの。



「鉄地銀形壺」第9回日展（1977）：溝38×38×高さ31cm、四面の圖案は各々に異なる。



「鉄地銀形壺」第16回日展（1984）：横のシリーズで凸凹を試みたとの作品。



「双魚」第17回日展（1985）：裏のシリーズは以下「双翅」、構想中の「魚鱗」へ。

〈資料紹介・歴史〉

新収蔵

島義勇関係史料

佐賀の七賢人の一人に数えられる島義勇(1822~1874)は藩校弘道館に学び、のち水戸の藤田東湖とも親交があり、藩主鍋島直正の命で蝦夷(北海道)の探検を行い、戊辰戦争で活躍した。下野・上野鎮撫軍監から江戸鎮将府会計官判事、鎮台府判事会計局判事をへて、明治2年(1869)には蝦夷開拓使首席判官となり、蝦夷地を探検して、「入北記」を著した知識と経験を買われて、蝦夷開拓使の長官・鍋島直正のもとで北海道の開拓に努力し、とくに札幌の開府に功績があった。明治政府のもとでは三条実美的信任をうけていたといわれる。

この島義勇関係の史料が昭和60年の暮から今年にかけて5点寄贈と購入によって本館の収蔵となった。うち、4点は福岡市城南区鳥飼の竹中宏幸氏のご好意による御寄贈分でその資料価値からいっても一等資料である。

なお、秀村選三氏・細川章氏に仲介の労をとっていただいた。

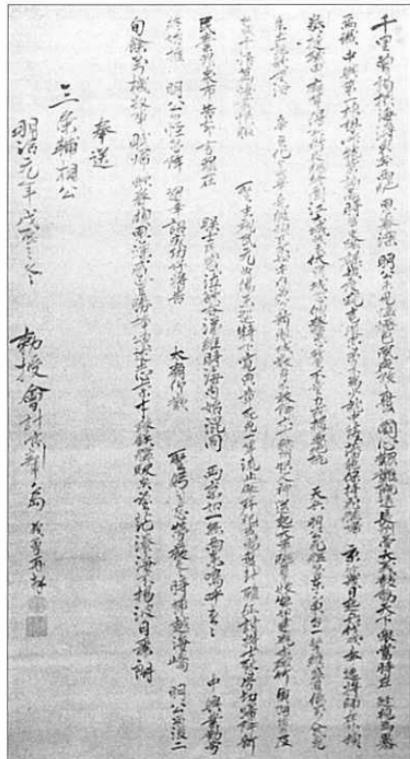
寄贈資料

1 書幅 紗本 138×70

明治元年(1868)の冬、勅授会計官判事島義勇が「奉送 三条輔相公」として三条実美にあてたもので、三条実美が明治維新のために東奔西走して九州太宰府に流されての危機を乗り越えて、大政奉還後、江戸開城、奥羽越列藩同盟を屈伏させるなどの動きの中での政府内でのすぐれた指導力を称賛する内容の漢詩文である。全文377字、8行にわたる長文で、島の書簡などにみられる奔放な力強い字体からみると、非常にまとまった行儀の良い字体である。当時、天皇を補佐して政治を行う地位である輔相に岩倉具視とともに任せられていた三条実美に対して会計官判事という官僚の地位にあった島義勇が、最大の敬意を払っての贈呈文であることが、文章からも、書体からも読みとれる。島義勇と三条実美的関係を知るうえでの貴重な資料である。ただ、この書幅が島家ゆかりの竹中家に残されているのは、この書幅が複数作成されたのか、贈呈までには至らなかったのか疑問である。

2 書簡 島義勇より重松・副島宛 17.5×64.5

年は不明であるが、内容からみて島が、蝦夷開拓使首席判官に任せられていた明治2年のものと考えられる。佐賀藩の重松(音左衛門か)、副島(二郎か)にあてたもので



資料1 島が三条実美に送った漢詩文

副啓

従二位様より御書拝領仕候、早速、掛物に持江に遣し候。誠に難有仕合に御座候、右乍序御知セ仕候 拝手

十月廿九日 義勇

重松様

副島様

とあり本文につけた追伸である。本文がないので本文の内容については不明であるが、従二位様、すなわち鍋島直正から書も戴いたので早速掛軸に仕立てた様にしたという内容で、島義勇がこのことに感激して重松・副島の二人にも伝えている。なお、さらに系図と「蝦夷行等々漫遊等ノ詩草稿文書等」も「健なる便にて」送ってくれる様に依頼している。

3 和歌3首 17.5×97.0

明治4年、明治天皇の侍従の職にあった島義勇が、宮廷での神楽や、さらには12月15日、天皇みずから剣を義勇に与えられたことに感激して和歌を記している。

義勇

神樂

調あふ 神樂の音の 清ければ
天下りぬる 神もきくらん

明治四年辛未十二月十五日

天皇御手自 御剣を賜ふ
特恩之厚 不絶感激屏宮之至 即詠歌 乃長傳
于子孫二首

天皇の恵も厚 剣太刀

世々に傳て國を守らむ

諸々の夷の國を 討時に

御太刀振て 黙たててん

「長く子孫に伝える」という前書の文にもあるように島義勇の感激が伝わってくる。技巧のない素直な歌だけに島義勇の気持ちは高ぶりも読みとれる。彼は天皇の侍従となったことに誇りを持っていたと考えられる。また、宮廷で奏される神楽など、宮廷の空気に酔ったふしもあり、感激屋の一面をのぞかせている。

4 書簡 島義勇より大久保・副島宛

18.7×201.0



資料4 大久保・副島参議宛 後半略

年紀はないが、内容から彼が蝦夷開拓使首席判官の地位にあった明治2年12月3日に参議大久保利通・同副島種臣にあてた書簡である。島義勇は明治2年9月20日に東京を出立し、25日に函館に着船している。札幌を中心として北海道の開発に着手したが兵部省との協力関係で苦心し、石狩・小樽・高島の三郡が兵部省の管轄であったために、開拓使の事業の推進に苦慮している。彼は10月23日に東京にいた開拓使官松浦武四郎と岩村通俊にあてて書簡を送り窮状を訴えて小樽・高島の両郡を開拓

使の管轄とすることを依頼している。なお、両名に対して三条実美・岩倉具視をはじめ、大久保・副島の両参議にも相談してほしいと申し送っている。

この書簡は、これに関連したもので、大久保・副島の両参議に直接訴えている。

内容は、北海道の石狩・小樽の両郡が住みにくいところで、兵部省から派遣された井上俊次郎が表面は従つたふりで、なかなか協力しないで困っている。札幌を中心置いて「大府」を開けば、将来は「世界の大名郡」となるとして、札幌を中心とする北海道の開発構想を述べている。また、前述の松浦・岩村にあてた書簡の内容にもある様に、小樽・高島の両郡を兵部省の管轄から開拓使の管轄に移し、兵部省へは代替地として浜益と厚田の両郡を与える様に兵部省の船越衛（兵部大丞）とよく相談してもらおう様に依頼している。なお、追伸として、銭箱にしばらく滞在し、札幌に官舎を建設する予定であるとしており、札幌を北海道開発の中心に据えていることが理解できる。なお、北海道の寒い様子（11月3日は西暦1869年12月5日）を「風雪寒氣は随分強く、茶こぼし、楊子等も、酒も氷り候事にて…」と記している。島が北海道にはいっての当初の仕事が理解できる資料である。

購入資料

5 書幅 27.7×38.6

島義勇と藤田東湖（1806～1855）の間には16歳の年齢差があるが、両者の交友は島が弘化元年（1844）に佐賀の弘道館を卒業して諸国に遊学した約3か年の間と考えられる。島の尊王攘夷の思想的背景には藤田東湖の影響が大きいと考えられる。年齢差からみて藤田は島の師であり、この書幅の中でも「奉留別 東湖藤田先生」として東湖を尊敬している。東湖は弘化元年、水戸の徳川齊昭の蟄居にしたがって蟄居していたので水戸藩領内で逢ったのかも知れない。東湖との別れを惜しみ、七言絶句の漢詩の後に

こへしらふ 心つくしの 笛とめて
また遇までのかたみとそする

という和歌を記している。

（学芸課長 小宮睦（）

行事のお知らせ（昭和61年度）

会 場	第3期常設展	内 容	観 覧 料
博 物 館	中展 大展 1号 2号 3号	佐賀県の地質や自然・先史時代から近代にいたる歴史と文化について自然科学・考古・歴史・美術工芸・民俗の各部門について系統的に資料を展観。	大人 200 (150)
			大・高生150 (100)
			中・小生 70 (50)
			()内は20名以上の団体。
美 術 館	1号	郷土出身作家の彫塑・陶磁・染職・金工などの代表の工芸品をはじめ、百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助、小代為重、高木背水などの近代洋画を紹介。	()内は20名以上の団体。
	2号		
	3号		

企画展

展 覧 会 名	会 期	会場	展 覧 会 名	会 期	会場
第7回 佐賀新聞学生書道展	12月3日～12月7日	美術館	佐賀大学書道部OB展	1月21日～1月25日	美術館
第28回 佐賀大学教育学部美術・工芸科総合展	12月16日～12月21日	美術館	古川松根展	1月23日～3月1日	博物館
第9回 さが行動展	1月13日～1月18日	美術館			

佐賀県立博物館特別企画展

森林と文化展

主旨 長い地球の歴史の中でつくられた森林は、自然が生んだ人類の財産である。この地球のみに存在する貴重な財産も、近年世界的な規模で減少が進んでおり、森林の保護育成が必要な時期に来ている。

また、人々は昔から森林に食べ物や生活の場を求め、建造物、食糧、衣服、農漁具、家具、工芸品など、さまざまな分野の素材を森や緑、そこに住む生物から得た。

本展覧会は、昭和62年5月、全国植樹祭が佐賀県で開催されるのを機会に、県内各地で進められている森林や緑を守り育てる運動、地史及び動植物の調査、森林と人々の生活を紹介し、合わせて照葉樹林文化の特色を探るものである。

主 催 佐賀県・佐賀県教育委員会

佐賀県立博物館

第38回全国植樹祭実行委員会

協 賛 佐賀県緑化推進委員会

会 場 佐賀県立博物館、佐賀県立美術館

会 期 昭和62年5月2日(土)～5月31日(日)
(但し、期間中6・11・18・25日は休館します。)

展示概要 森林のジオラマ（春の森林、森林のはらき）

森林の誕生と歴史

森林の生態系

佐賀県の自然

佐賀県の植物や動物

木の文化、木の産業、林業関係

自然公園や県市町村の木と花

約500点

博物館・美術館報 第75号

発行年月日 昭和61年12月20日

編集 大塚正道

発行 佐賀市城内1丁目15番23号

佐賀県立博物館

佐賀県立美術館

印 刷 ㈲大同印刷